

研究・調査報告書

報告書番号	担当
263	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)	
<p>Binge drinking during pregnancy and risk of seizure in childhood: a study based on the Danish National Birth Cohort.</p> <p>妊娠中の多量飲酒と小児けいれんのリスクについて</p>	
執筆者	
Sun Y, Strandberg-Larsen K, Vestergaard M, Christensen J, Nybo Andersen AM, Gronbaek M, Olsen J.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Am J Epidemiol. 2009;169:313-322	
キーワード	
妊娠中、多量飲酒、小児、けいれん、てんかん	
要旨	
<p>目的： 胎児性アルコール症候群の罹患児ではけいれんを認めることが多い。しかし、アルコール依存症でない女性の妊娠中の多量飲酒が小児のけいれん関連疾患のリスク上昇と関連するかについては明かでないため、これを検討する。</p> <p>方法： 対象はデンマークの1996年から2002年の出生コホート(the Danish National Birth Cohort)における単生の出生児80,526例である。妊娠中、母親に多量飲酒(一回に5杯以上)の有無について二回、電話調査を行った。出生児が8歳になるまで追跡を行った。新生児期のけいれん、てんかん、熱生けいれんについての情報は国の病院登録システムより入手した。</p> <p>結果： 妊娠11週から16週の多量飲酒への胎児生曝露は小児のけいれん関連疾患のリスク上昇と関連を認めたが、それ以外の妊娠時では関連を認めなかった。妊娠11週から16週の間多量飲酒に胎児性曝露した小児では、けいれん関連疾患のリスクが上昇していた新生児けいれん3.15倍(95%信頼区間1.37-7.25)、てんかん1.81倍(95%信頼区間1.13-2.90)。</p> <p>結論： 本研究の結果から妊娠中の特定の時期に、母親の多量飲酒に胎児性曝露することは、児のけいれん関連疾患のリスクを増加させる。この検討はさらに検証していく必要がある。</p>	